

立川シビル市民講座《チェ・ゲバラを読む》 2009/11～2010/1(全6回) 太田昌国

- ◎①「旅するゲバラ」 2009/11/14 (土)
- ②「1960年代の只中のゲバラ」 2009/11/28 (土)
- ③「浮上する民族・植民地問題とゲバラ」 2009/12/12 (土)
- ④「映像の中のゲバラ」 2009/12/26 (土)
- ⑤「ゲバラ・革命の経済学」 2010/01/09 (土)
- ⑥「未来からの目でゲバラを捉え返す」 2010/01/23 (土)

講座全体を通して考えたいこと 「歴史の中の個人の役割」という問題意識から見た場合、チェ・ゲバラに対する関心は、世界中で、そして日本でも異常なまでに高すぎる。それは、20世紀型社会主義の試みが失敗し、人間社会のあり方に関する理想主義を保証する思想と行動が明快な形では見えない混迷の時代にあって、かつて「権力に固執することなく清廉な生き方で理想に殉じた」と思える人物に対して、何事かを託したいと願う私たちの「代償行為」かもしれない。そこから抜け出すこと——チェ・ゲバラをキューバ革命、ラテンアメリカ、第3世界、世界の、20世紀後半という同時代の動きの中での一人物として捉えること、時代状況が様変わりした21世紀初頭に生きる私たちの問題意識の中で、彼の思想と行動を相対化すること——それに尽きる。

チェ・ゲバラの人生は、《旅》の連続だった。しかも、本人がその記録を、日記・書簡・回顧録・演説・論文などの形でことごとく残し、日記・書簡に関しては家族・関係者が保存していた。チェ・ゲバラが行なっていたいくつもの旅と、それにまつわる本人および関係者の「表現」をたどることで、彼の人生の全貌が浮かび上がる。

1928 生まれる

1951/12/31～52/08/31 モーターサイクル南米旅行

☞チリ銅山で働く労働者との出会い、ペルーアマゾンでのハンセン病患者との出会い

『モーターサイクル南米旅行日記』(現代企画室、角川文庫)

1953/06 ブエノスアイレス医科大学卒業

1953/07/07 2度目の南米旅行へ出発(本来の目的地はベネズエラのハンセン病院)

☞マチュピチュ遺跡の見学と見聞録、エクアドルの作家ホルヘ・イサカとの出会い(『ワシントン』の著者)

「マチュピチュ アメリカの石の謎」(太田昌国編『アンデスで先住民の映画を撮る』所収、『チェ・ゲバラ AMERICA 放浪書簡集』、『チェ・ゲバラ ふたたび旅へ——第2回 AMERICA 放浪日記』(いずれも、現代企画室))

☛1953/07/26 キューバで、フィデル・カストロら125人、政府軍兵営モンカダを攻撃、

失敗。フィデル法廷演説「歴史は私に無罪を宣告するであろう」

- ☛1955/05 フィデルら、恩赦で出獄、メキシコへ亡命
- 1953/12 グアテマラへ到着
- 1954/06 民族主義左派のグアテマラ政権、CIAを背後にもつ軍事クーデタで倒壊
- 1954/09 メキシコへ逃れる
- 1955/06 フィデルとチェ・ゲバラの出会い
 - キューバへの反攻のための軍事訓練始まる
- 1956/11/25 82名のゲリラ兵士、グランマ号でキューバへ向かう
- 1956/12/01 キューバ東岸の一地点に上陸
- 1959/01/01 パチスタ独裁体制を打倒して、キューバ革命勝利
 - ☛「キューバ革命」をめぐる「神話」の誕生
 - 『革命戦争の回想』（筑摩書房、青木書店、原書房、中央文庫）
 - 『ゲリラ戦争』（三一新書、中公文庫）
 - ☛「キューバ」という場所は、世界に向かって何を暗示しているのか
- 1959/06/12～09/08 諸国歴訪（アラブ連合、インド、日本、インドネシア、セイロン、パキスタン、スーダン、モロッコ、ユーゴスラヴィア）
 - ☛日本訪問時の挿話（無名兵士墓苑献花拒否・広島行き強行）から、何を学び取るか
- 1960/03/05 前日起こったハバナ港停泊中のアントワープ発フランス船籍船舶爆破事件
犠牲者の追悼式の中で、後に有名になる「英雄ゲリラ」の写真が偶然に撮られる。
- 1960/10/22～12/23 経済使節団長として社会主義諸国歴訪（チェコ、ソ連、中国、北朝鮮、東独）。毛沢東、周恩来、金日成などにも会う
- ☛1961/04/15 米国支援の反革命部隊、キューバ侵攻。72時間でこれに勝利。
- ☛1961/04/16 フィデル、「社会主義宣言」
- 1961/08/02～08/23 プンタ・デル・エステ（ウルグアイ）で開催された米州機構（OAS）
経済社会会議に出席し、北米帝国主義と「進歩のための同盟計画」に対する非難演説。
- 1962/08/26～09/05 経済使節団長として、ソ連、チェコ歴訪
- ☛1962/10/22～10/28 10月危機（ミサイル危機、キューバ危機）
- ☛1962 年末ころから、大使館員としてハバナに滞在するソ連 KGB（国家保安委員会）メンバーは、反ソ的言動が目立つチェ・ゲバラに対する監視活動を開始する
- 1963/02 論文「官僚主義に反対する」発表
 - ☛トマス・グティエレス・アレア監督「ある官僚の死」（1966）
- 1963/06/30～07/25 独立一周年記念式典出席のためアルジェリアへ。ベン・ベラに会う
- 1964/03 キューバで地下活動訓練を受けていたドイツ系アルゼンチン人、タマラ・ブンケに、ボリビア支配層に取り入ったの諜報活動を依頼

1964/03/17～04/18 第一回国連貿易開発会議出席のためジュネーブ（スイス）へ。帝国主義の経済侵略を批判する演説を行なう。その後アルジェリアへ

1964/11/04～11/19 ロシア革命 47 周年記念式典参加のためにソ連へ。ソ連型社会主義モデルをキューバに押し付けようとするソ連の強い意図をひしひしと感じ、もはや革命政府に留まるべきではないとの決意を固め、フィデルに申し出たが慰留されたという説がある。確かにこの間、国立銀行をはじめキューバの経済関係部門にはソ連からのスタッフが増え続けていた

1964/12/09～1965/03/14 第 19 回国連総会出席のためニューヨークへ。総会でキューバ代表として演説（ソダバーグの映画『チェ 28 歳の革命』にフラッシュバックで挿入されたシーン）し、コンゴ情勢全般、とりわけパトリス・ルムンバの死について深く言及。ニューヨーク・ハーレムには、マルコム X がいたが、会うと「内政干渉」の非難を受けるかもしれないことを警戒し、会わず、メッセージを送る。これを代読したマルコム X は、翌年 2 月 21 日暗殺された。ニューヨークからカナダ経由でアルジェリアへ。以後、マリ、コンゴ（ビラザビル）、ギニア、ガーナ、ダオメー、タンザニア、ケニア、アラブ連合共和国、中国、そして再度アルジェリアへ。

■1965/02/07 米国、北ベトナム爆撃開始

1965/02/24 アジア・アフリカ連帯機構第 2 回経済会議（アルジェ）に参加し、貧しい国々との貿易のあり方に関して、ソ連を批判

1965/03/03 再度アラブ連合共和国へ。アフリカ各地の解放運動支援の課題に関して、ナセルやベン・ベラと討議。

1965/03/15 3 ヶ月ぶりに帰国。

- 1965/03/29 工業省の主だったスタッフに別れの挨拶、『資本論』などの愛読書に献辞を書いて知人に贈る
- 1965/03/31 フィデル、チェ・ゲバラの居場所を訪れ、互いに別れを告げる。チェ、「別れの手紙」をフィデルに託す（1965/10/03 キューバ共産党中央委員会指名式の席上でフィデルが朗読）
- 1965/04/01 容貌を変えたチェ・ゲバラ、ハバナ空港から偽造パスポートで出国。何度かインタビューを受けたジャーナリストも乗り合わせたが、チェであることに気づかず。
- 1965/04/19 タンザニアのダルエスサラームに着く
- 1965/04/20～11/20 数十人のキューバ兵と共に、タンガニーカ湖を渡った対岸の町キバンバ（コンゴ領）に拠って、コンゴ解放闘争への支援を企図
- ☛1965/04/28 内戦状態のドミニカに米国海兵隊が武力侵攻
 - ☛1965/06/19 アルジェリアのベン・ベラ大統領、クーデタで失脚
- 1965/11/21～ 密かにタンザニアのダルエスサラームに滞在。コンゴ総括と経済学関係の論文を書くことに専念。今後の方針をめぐって、フィデルとの間で激しいやりとり
- ☛パコ・イギナシオ・タイボ他『ゲバラ コンゴ戦記 1965』（現代企画室）
 - ☛『革命戦争の道程：コンゴ編』（未訳、現代企画室刊行予定）
- 1965/12/28 ヨーロッパの某国に入る。その後、プラハ（チェコスロヴァキア）に密かに入り、しばらく過ごす
- 1966/07/20 ジュネーブ、チューリッヒ、モスクワ経由でキューバに密かに戻る。ボリビア行きを志願するメンバーの軍事訓練がキューバの某所で続けられる
- 1966/10/23 偽造パスポートでキューバを去る
- 1966/11/03 ボリビアのラパスに入る
- 1966/11/07 ボリビア東部のゲリラ根拠地へ。
- ☛1967/04/16 3大陸人民に寄せるゲバラ・メッセージを、3大陸人民連帯機構書記局が発表（「2つ、3つ、数多くのベトナムをつくれ、これが合言葉だ」）
- 1967/10/08 政府軍との遭遇戦で負傷、捕えられる
- 1967/10/09 射殺される
- ☛『ボリビア日記』（68年当時は三一書房、朝日新聞社、太平出版社、角川文庫、みすず書房、現在は原書房、中公文庫）
 - ☛『国境を超える革命』（レポルト社）
 - ☛もろもろの論文・演説を収めた『ゲバラ選集』全4巻（青木書店）
 - ☛現在でも入手できるのは『ゲバラ 世界を語る』（中公文庫）

立川シビル市民講座《チェ・ゲバラを読む》 2009/11～2010/1(全6回) 太田昌国

- ①「旅するゲバラ」 2009/11/14 (土)
- ◎②「1960年代の只中のゲバラ」 2009/11/28 (土)
- ③「浮上する民族・植民地問題とゲバラ」 2009/12/12 (土)
- ④「映像の中のゲバラ」 2009/12/26 (土)
- ⑤「ゲバラ・革命の経済学」 2010/01/09 (土)
- ⑥「未来からの目でゲバラを捉え返す」 2010/01/23 (土)

問題のありか

キューバ革命の勝利の年(1959年)から、ボリビアにおける死の年(1967年)までの、わずか8年間に凝縮して表現されているチェ・ゲバラの思想と行動の軌跡を特殊化する(特別な位置に押し上げる)ことなく、「第3世界」の台頭が新しい歴史像と世界像を創造していた世界的な時代状況の中へ投げ込むこと。「1960年代」を準備した先人たちの試行錯誤・問題提起の延長上で、この時代を捉えること。

その場合、鍵となる概念は、「帝国主義と植民地問題」。キューバを含むカリブ海域(=西インド。欧米の用語で言えば)は、初回に触れたように、「征服」によっていったんは「死の島」と化し、もとの住民が死滅した後に植民した白人と、強制連行されたアフリカの黒人によって構成されることになるが、数世紀の時間を経てキューバ革命の勝利に前後する時期に、そここそがヨーロッパ近代を、すなわち「世界史」を問い質す場所となることに着目すること。

主題が「チェ・ゲバラ」なので、以下の略年譜では「アジア」の動きが必ずしも重視されていないことに留意。

1944 エリック・ウィリアムズ(1911□1981)『資本主義と奴隷制』(理論社、1968。新訳が明石書店から2004年に出ているが、前者で読むのが望ましい。絶版だが図書館か古書店で探して)

1945 ファシズム3国(イタリア、ドイツ、日本)が敗北

1948 イスラエル建国。韓国済州島で4・3蜂起と弾圧

サルトル「黒いオルフェ」(『シチュアションⅢ』人文書院、改版1964)

1950 朝鮮戦争、中国人民義勇軍が鴨緑江を越える。中国軍がチベット侵攻開始

警察予備隊発足

1951 朝鮮休戦会談

1952 米国・キューバ間で相互軍事協定調印後に元大統領バチスタによる軍事クーデタ

日本の占領終結、同時に日米安保同盟発足

フランツ・ファノン(1925□1961)『黒い皮膚・白い仮面』(みすず書房、1970)

- 1953** 朝鮮休戦協定。フィデルら政府軍兵営モンカダ攻撃
- 1954** ベトナム軍がディエン・ビエン・フー攻略。フランス植民地主義の敗北
- 1955** 第1回アジア・アフリカ会議
 エメ・セゼール (1913-2003) 『植民地主義論』 (『帰郷ノート、植民地主義論』平凡社、1997)
- 1956** グランマ号キューバへ。ソ連共産党 20 回大会でスターリン批判。ポーランドとハンガリーで反政府暴動、ソ連軍がハンガリーに介入。エジプト (ナセル) がスエズ運河国有化宣言し英仏軍はポートサイド占領 日本、国連加盟
- 1957** ソ連が人工衛星スプートニク打ち上げ成功。アジア・アフリカ人民連帯会議
- 1958** 第1回アフリカ人民会議開催
- 1959** キューバ革命成る
 フランツ・ファノン 『革命の社会学』 (みすず書房、1969)
- 1960** 南ベトナム解放民族戦線成立。第2回アフリカ人民会議。アフリカ 17 カ国独立。アジア・アフリカ連帯会議 安保闘争
- 1961** 韓国軍事クーデタ。インドがポルトガル領ゴアを武力制圧。米国がキューバと断絶。反革命軍がキューバに侵攻。コンゴのルムンバ首相 (1925~1961) 殺害さる。ポルトガル領のアンゴラとギニアで武装蜂起。南アに人種差別反対の「民族の槍」誕生 (指導者はネルソン・マンデラ)
 フランツ・ファノン 『地に呪われたる者』 (サルトルの序文を付して。みすず書房、1969)
- 1962** アルジェリア独立。キューバが米州機構から脱退。ミサイル危機。この頃からラテンアメリカ各国で反政府武力闘争始まる
- 1963** ケネディ暗殺
 サルトル「パトリス・ルムンバの政治思想」 (『シチュアシオン V』人文書院、1965)
- 1964** 米軍がトンキン湾事件を口実に北ベトナム海軍基地を攻撃
 フランツ・ファノン 『アフリカ革命に向かって』 (みすず書房、1969)
 クワメ・エンクルマ 『新植民地主義』 (理論社、1971)
 この年の12月国連総会での演説を終えたゲバラはその足でアルジェリアへ向かい、ベン・ベラと頻りに会議を行ない、ジョージ・ファノン (フランツの妻) のインタビューを受け、マリ、コンゴ (ブラザビル)、ギニア、ガーナ、ダオメー、中国、タンザニアを訪問して各国首脳との会談を行ない、最後に再度アルジェに戻って、ソ連批判の演説を行なって帰国したのは、4ヵ月後の65年3月14日であった。ファノンの『地に呪われたる者』スペイン語版への序文を執筆する約束もこの頃なされたが、それは実現しなかった。
- 1965** 米軍が北ベトナム爆撃開始。マルコム X 暗殺さる。南ベトナム民族解放戦線が世界

に「軍事援助・物質的援助・義勇軍派遣」を要請。インドネシア9・30事件。アルジェリアでクーデタが起こりベン・ベラが失脚。

この年の4月から11月までの7ヵ月間、ゲバラと数十人のキューバ兵はコンゴ解放闘争への支援の任務を果そうとしていた

日韓条約締結

1966 ハバナでアジア・アフリカ・ラテンアメリカ3大陸人民連帯会議。中国文化大革命開始

この年7月に密かにキューバに戻ったゲバラは同志を募り、10月にはキューバを去ってボリビアへ入った。

1967 中東戦争。米国各地で黒人暴動。「ブラック・パワー」「レッド・パワー」の声がよく聞かれた時代。4・16 ゲバラ・メッセージ「二つ、三つ、数多くのベトナムをつくれ、それが合言葉だ」発表。10月9日チェ・ゲバラがボリビアに死す

1968 ソ連軍主力のワルシャワ条約軍がチェコ侵攻、これをフィデル・カストロが支持したためにキューバ革命に対する熱狂的な支持に翳り

堀田善衛「第3世界の栄光と悲慘について」(『現代人の思想・民族の独立』平凡社、1968)

1970 エリック・ウィリアムズ『コロンブスからカストロまで——カリブ海域史、1492-1969』(岩波書店、1978、Ⅰ・Ⅱ巻)

1976 ラス・カサス『インディアスの破壊についての簡潔な報告』日本語訳刊行(岩波文庫、のちに『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』現代企画室、1987)

★きょうのCD

“EL CHE”，1997 PolyGram Disco S.A., Argentina

1曲目と3曲目を歌っているのが、メルセデス・ソーサです。

立川シビル市民講座《チェ・ゲバラを読む》 2009/11～2010/1(全6回) 太田昌国

- ①「旅するゲバラ」 2009/11/14 (土)
- ②「1960年代の只中のゲバラ」 2009/11/28 (土)
- ◎③「浮上する民族・植民地問題とゲバラ」 2009/12/12 (土)
- ④「映像の中のゲバラ」 2009/12/26 (土)
- ⑤「ゲバラ・革命の経済学」 2010/01/09 (土)
- ⑥「未来からの目でゲバラを捉え返す」 2010/01/23 (土)

問題のありか

今日の課題は、第2回の問題意識の延長上にある。1950～60年代に、カリブ海域とアフリカを主要な発信地として、帝国主義による植民地支配の問題をどう捉えるか、それが遺した「負の遺産」をいかに克服するかが、重要な課題としてせりあがってきた。提起した主体はその後どうなったか。帝国内部から、それに呼応する声はあがったか。

そこでは同時に、当然にも、その支配によって歪められ、敵対させられる場合も多かった民族間の関係性の問題が浮上してきた。チェ・ゲバラは、この問題にいかに対応したか。

ゲバラが考えた帝国主義・植民地問題の構造

◎1964/12/11 国連演説 (第19回総会)

前回見た、当時の世界情勢を反映して、ベトナム、ラオス、カンボジア、ポルトガル領アフリカ、プエルトリコ、マルチニック、南アフリカ、コンゴに、とりわけ言及。

「北アメリカ帝国主義は、平和共存が世界の強大国の排他的権利なのだ」と世界中に信じこませようとしている」→平和を語りながら、戦争を行なう大国→いまなお続く現実。

■グアタナモ米軍基地 (1903～) という不条理に、帝国主義による他国支配の典型を見る→敗戦後64年を経てなお米軍の居座りを許している日本の現実。

ミサイル危機 (1962/10) の解決が、キューバの頭越しになされていなかったならば、キューバは米国にグアタナモ基地の返還を要求したし、それは実現していたかもしれないとするフィデル・カストロの回顧。

◎1965/02/26 アジア・アフリカ経済会議での演説

「独占資本家が世界を奪い取って以来、彼らは、人類の大部分を貧困のなかにたたきこみ、強大な諸国家内部のいくつかのグループに富を分配してきた。これらの諸国の生活水準の高さは、われわれの生活の貧しさによって維持されてきたものである」。

◎1967/04/16 「二つ、三つ、数多くのベトナムをつくれ……それが合言葉だ」 (ボリビア山中から)

ベトナムに反帝国主義闘争の典型を見る。

提起した主体のその後

◎カリブ海域・ラテンアメリカで

キューバ革命に続いて起きた、ほぼすべての国々における武装闘争（農村と都市）は成就しなかった。

1970 チリ革命（選挙を通じて）→1973 軍事クーデタで斃れる。

1979 ニカラグア革命→米国支援による反革命軍の軍事行動→1990 選挙で敗れる。

そして現在 ベネズエラ、ボリビア、ニカラグア、エクアドル、ブラジル、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、パラグアイ、エルサルバドルなどに、米国の一極支配に従属しない政権が成立し、継続している。（詳しくは、最終＝第6回で）

◎アフリカで

1962 アルジェリア独立→しかし、その後の経過を見ると、ファノン、エンクルマ、ゲバラたちが展望した「大陸革命」「アフリカ統一」に向かったの動きは挫折した。

☞植民地遺制の重荷と、旧宗主国、新植民地主義勢力による妨害活動

☞新しい指導部の専制・腐敗・墮落と、知識人の沈黙

アルベール・メンミ『脱植民地国家の現在』（法政大学出版局、2007年）

☞内戦・民族間対立と抗争

☞語られた「夢」「希望」「理想」「正義」と、背後の現実→どの革命にあっても、その中に虚偽・偽善・不正義・非民主主義を嗅ぎとった人びとの手になる証言や論考がある。それを読み、知り、なお「理想」を失わない場所は、どこにあるのか？

アンドレ・ジイド『ソビエト紀行』上下（新潮文庫）

ジョージ・オーウェル『カタロニア賛歌』（岩波文庫）

シモーヌ・ヴェーユ「戦争に関する考察」「革命戦争についての断章」（『シモーヌ・ヴェーユ著作集』I、春秋社、新装版1998年）など無数。

ゲバラが直面した民族問題

◎モーターサイクル旅行の途上で

白人国＝アルゼンチンを出て、チリのメスティーソ色の強い鉱山労働者、先住民の多いペルーで何を感じたか。

◎白人と黒人の混淆国＝キューバで

革命後のキューバで、黒人差別は存在するか。

社会的役割、進出の程度。

アンゴラ出兵兵士の中では、黒人兵の比率が高かったという証言もあるが。

◎黒人国＝コンゴで

「白人の君が、黒人国へ行って軍事的指揮を取るのは危険」という、ナセルやベン・ベラなどの助言。それを、ゲバラはどの程度の重みで受け止めていたのか。
そして、現実はどうであったか。

◎先住民族が多数住むボリビアで

『ゲバラ日記』が物語ること——ゲリラ根拠地周辺部の農民・先住民（ボリビアには、ケチュア人、アイマラ人が多いが、そこはグアラニー人が住まう地域であった）。前出「ゲバラ・メッセージ」中の文言「ブラジルを除き、この大陸で使われている言葉はただ一種である。そして、スペイン語はブラジルで使われているポルトガル語に類似しているので、スペイン語を知っているなら容易にポルトガル語を理解できる。他の大陸に比べ、この大陸内の各国の住民は非常に類似性が強いので、遙かにはっきりと「国境なきアメリカ人」（インテルナシオナル・アメリカーノ）型を識別することができるのである。言語、習俗、宗教、同一の支配者等の共通の特徴が彼らを統一している。」→先住民族の存在が視野の外に。各民族の主体性・主体的選択はいかに保証されるのか。「中央」が常に統括することでよいのか。

☛チリの作家、ルイス・セプルペダの回顧

『パタゴニア・エクスプレス』（国書刊行会、1997年）の「訳者あとがき」

☛1994 メキシコ・サパティスタの登場の意義

マルコス＋イボン・ルボ『サパティスタの夢』（現代企画室、2005年）

1992 コロンブス五百年（1492→1992）以降、植民地支配がつくりだした先住民族が世界各地で「近代」を問い直し始めている。いわば、再審に付している。

★今日のCD

『永遠なるチェに捧ぐ』 desde Mexico, para siempre Che

TKF-2904 (2900円)

全11曲、合間に、ゲバラの語り、「別れの手紙」を読み上げるフィデル・カスト

ロの声名 d も入っている。

立川シビル市民講座《チェ・ゲバラを読む》 2009/11～2010/1(全6回) 太田昌国

- ①「旅するゲバラ」 2009/11/14 (土)
- ②「1960年代の只中のゲバラ」 2009/11/28 (土)
- ③「浮上する民族・植民地問題とゲバラ」 2009/12/12 (土)
- ◎④「映像の中のゲバラ」 2009/12/26 (土)
- ⑤「ゲバラ・革命の経済学」 2010/01/09 (土)
- ⑥「未来からの目でゲバラを捉え返す」 2010/01/23 (土)

きょう観る映像

「チェ・ゲバラ—革命にかけた生涯」 前編・後編 (フランス、シネテベ、1997年制作、90分)

死後30年を迎えた1997年に、フランス・テレビ局が制作したドキュメンタリー。一部では再現ドラマ風の映像が使われているが、インタビューしている相手の人選が的確で、事実に基づいた証言を引き出していると思われる。また研究者のコメントも、当時の状況を正確に捉えていて、信頼できる。これまでの3回の講座の内容を思い返ししながら、チェ・ゲバラの全生涯をふりかえるためには、格好な素材と思われる。これは、NHKBSドキュメンタリー「20世紀人物列伝」として、98年9月19日および26日に放映。

映像を観る前に

キューバ革命を政治・社会革命の側面だけではなく、「文化革命」として見る視点をもつことが重要だと思える。Ex. ロシア革命後のロシア・アヴァンギャルドの活況。

◎ 全大陸規模での文学的活況

各国ごとに孤立していた文学的営み。

革命直後に「カサ・デ・ラス・アメリカス」(アメリカの家)という文化機関を創設。芸術家の相互交流の場に。出版活動も活発化。

1960年代後半からラテンアメリカ文学の世界的な「ブーム」
■キューバ国内においては、特定の文学者に対する表現弾圧が並行して行なわれていたことに留意。

◎ 映画製作も盛んに

1950年代半ば、イタリアン・リアリズムの映画創りが隆盛を極めていた頃、ローマのチネチッタで学んでいた、その後のキューバ、ラテンアメリカ映画の巨匠たち。ガルシア＝マルケスもそこにいた。

1960年代以降の映画制作——ハリウッドによるマーケットの独占支配を打破。

■ボリビアのウカマウ集団 (ホルヘ・サンヒネス監督)

◎ 音楽の豊かさ

民族的多様性に根ざす。

きょうのCD

Lalo Schifrin “Che!” ,

Warner-Tamerlane Pub. Fox Special Account; Scherzo Music Inc.

立川シビル市民講座《チェ・ゲバラを読む》 2009/11～2010/1(全6回) 太田昌国

- ①「旅するゲバラ」 2009/11/14 (土)
- ②「1960年代の只中のゲバラ」 2009/11/28 (土)
- ③「浮上する民族・植民地問題とゲバラ」 2009/12/12 (土)
- ④「映像の中のゲバラ」 2009/12/26 (土)
- ◎⑤「ゲバラ・革命の経済学」 2010/01/09 (土)
- ⑥「未来からの目でゲバラを捉え返す」 2010/01/23 (土)

問題のありか これまでの講座で見てきたように、チェ・ゲバラは、カストロ体制が強調してきた「英雄的ゲリラ」という側面でのみ語られることが多かった。その著作も、旅行記や「革命戦争」の記録などは広範に刊行され、読まれてきた。外部世界の私たちの視野も、当然にも、その制約の範囲内にあった。最近でも、スティーブン・ソダバーグの映画2部作は、キューバとボリビアにおける武装闘争の局面に限定してチェ・ゲバラを描いており、作品が帯びている「欠落感」は覆いがたい。革命が勝利した1959年から、ゲバラが出国した1965年までの過程に何があったのか。彼は次々と、土地改革局工業部門責任者(1959・10)、国立銀行総裁(1959・11)、工業担当相(1961・2)に任命されるが、そこで彼はいかなる政策を目指していたのかという問題は、こうして、キューバの内でも外でも徹底して軽視されてきた。情報公開が一定進んだ現在においても、研究上の蓄積が十分とは言えず、キューバの外に住む者にとってこの問題を追求することは、きわめて困難である。今回は、主として以下の書物を参照しながら、論点の整理を行ないたい。

1) 1960年代末期までに明らかになっていた論点に即した書物

K・S・カロール『カストロの道——権力を握ったゲリラ』(読売新聞社、1972年)
フランス語原書は1970年刊行。71年に一部加筆訂正。

2) 50年間におよぶキューバ革命の全過程をほぼ見届けて書かれた書物

Helen Yaffe, **CHE GUEVARA, The Economics of Revolution, palgrave macmillan, London, 2009.** (ヘレン・ヤッフェは英国のラテンアメリカ史研究者)

この問題を考えることは、彼岸のことがらではないにも留意したい。変革された新しい社会において、蓄積されてきた過去の負の遺産をどう克服するのか／人は何のために働くのか／経済的な実利のためにか、経済的な実利なら獲得し得たといえる「豊かな社会」で、人間の疎外状況が広範に存在することに人は耐えられるか／他方、働くことで得られた「成果」や「価値」をどう生かすのか——など、どの社会で生きる者にも普遍的な問いに、それは繋がっていくからである。

20世紀型社会主義が崩壊した原因との関係で、チェ・ゲバラの試行錯誤の意味を考える

- 1) 党・政府・軍の権力が三位一体化して、独裁権力として機能
- 2) 大衆の自発性・創造性を無視・軽視・蔑視
- 3) 大衆と知識人による自由な言論と表現を弾圧
- 4) 経済運営に関わる諸問題
- 5) 軍事（解放闘争）・軍隊（革命軍）に関わる、旧態依然たる捉え方

1959年に革命キューバが引き受けた現実（当時の人口はほぼ700万人、現在1200万人）

—「低開発」とはどういうことか

首都ハバナは「繁栄」を謳歌しているかに見えたが、農村部の、とりわけ賃金労働者の生活は「惨め」の一語。「繁栄」のハバナを象徴するものは、キャデラック、キャバレー、カジノ、売春宿など、休暇中の米国人が主役の享楽施設。

住宅、水道、電気、衛生、医療、食事、教育のどの面から見ても、第三世界の典型。

労働人口の25%が失業しているのは常態。

平均寿命59歳。乳幼児死亡は千人当たり60人。

基幹産業・金融資本がほぼ米国企業に独占支配されてきた状況。季節的な産業である製糖業で働くことができるのは数ヶ月、残りは「死の季節」(tiempo muerto)。「人民は、単一の作物に生存の基盤をおくその日に、自殺する」(ホセ・マルティ) ❶キューバの場合は、それは「自殺」ではなく「殺人」なのではないか。

熟練労働者が形成されてきていない。

しかも、革命後に、旧社会の特権階級としての専門家は大量に亡命し、これまでキューバが生み出す甘い汁を独占的に吸ってきた米国による報復的な経済封鎖を受けるという状況の下で、30歳前後の青年たちが革命政権の中軸を担った。

チェ・ゲバラの立脚点

- 1) 資本主義システムを批判的に分析したマルクスの著作の研究。『資本論』。
- 2) 同時代に行なわれた、社会主義建設をめぐる政治経済論争への参画。
- 3) 資本主義企業が実現してきた技術的および管理運営上の成果に着目❶マルクスは、所与の社会が、資本主義的發展を遂げた果てにその墓掘人としてのプロレタリアートを生み出し、そのプロレタリアートこそが社会主義革命の担い手になることを展望していた❷接収した米国企業（電力）の会計文書を見たゲバラは、コストが上昇したり生産量が落ちたときの対応策の迅速性を読み取って、「独占企業」のあり方へ関心をもった

その「異端性」

生産力を向上させる量的な課題とともに重要なことは、共産主義社会に向けて人間の意識

と社会的諸関係を準備するという質的な課題である、と捉えていること。「われわれは貧困とたたかうが、同時に疎外ともたたかう」「マルクスは経済的な現実とともに、それが人の心に反映する事からも関心をもっていた」

年代をたどって

1959・ 5 全国土地改革局（I N R A）設立

1959・ 7～9 日本を含めた各国歴訪。労働者自主管理・自発的労働が実践され、ソ連圏にありながら、まるごと包摂されているわけではないユーゴに強い印象を受ける。

1959・10 I N R A工業部門責任者に任命

1959・11 国立銀行総裁に任命●economista と comunista をめぐるとおかしなエピソード

1960・ 8 米国所有の電力会社、電話会社、精油所、砂糖工場を国有化

1960・10 銀行、大企業をすべて国有化。米国は「これまでに 10 億ドル以上の米系資産が接収された」ことへの報復として、キューバへの禁輸措置

1960・10 ソ連はじめ社会主義圏歴訪し、そこに孕まれる矛盾に注目

1961・ 1 米国、キューバと国交断絶

1961・ 2 ゲバラ、新設された工業省の担当相になる●農業生産の多様化、製造工業の強化、外国貿易への依存度を減らすための工業化が不可欠●資金不足のため、「革命的クリスマスカード」の販売収入や幹部が供与の 50%を醸金して、捻出

1961・10 ゲバラ、工業省で自己批判、「人びとをゲリラ兵士のように扱い、厳格な規律を求め、討論を欠いて、まるでゲリラ・キャンプにいるような振る舞いだった。人びとと接する術を知っているフィデルと比して、自分はキャバレーも、映画も、ビーチも知らない。家庭にもいない。キューバの人びとの暮らしを知らず、統計と数字と概要（サマリー）に埋もれていた」●「人びとが、多様な各自の考えに基づき、多様な各自の確信をもって、国家社会が取るべき大きな集団的努力の一員であると感じられるような」方向性の追求を約束●生産の集団化・労働者の参加

同じ頃、雇用保障・教育と職業訓練と医療の無償制度・食糧配給制度・物価凍結など資本主義社会ではあり得なかった制度的な保障を享受し始めた労働者の中で、怠惰による「欠勤」が目立ち始めた●問題は生産コストへの影響だけではない、倫理の問題だ。キューバ革命に連帯して物資を送るために努力している中国民衆を思わないのか、とゲバラは語った。前年の中国訪問で、ゲバラは中国民衆の生活水準のつましさを知っていた。

1962・ 1 オートメーションとエレクトロニクスの時代が来ることを重視

1962・ 2 「社会主義圏で行なわれているような、物質的な刺激策と企業が財政上の自主権をもつことは、社会主義への進展を阻害する以外のなにものでもない」→論争の開始

- 1) 価値法則をめぐって
- 2) 金、財政、銀行をめぐって
- 3) 意識と刺激をめぐって

論争の中でのゲバラの位置——「先進国」でネオ・マルクス主義者たちによるソ連社会主義批判は既に行なわれていた。ゲバラは社会主義的な意識を現実に発展させる作業を行ないながら、政策決定の場にも居合わせた点で、前者とも異なる場所にいた。この過程で重点を置いたこと——教育（「そして専門家は誰もいなくなった」という状況への緊急の対応策。文化としての教育・政治教育・生産のための教育）、職業訓練、賃金体系の整備

テーマに沿って

◎ 意識（自覚）と心理

「意識性（自覚）は、労働者が生産管理を行なう上での前提条件」「生産力と同時に意識性（自覚）も高めることで、共産主義はより早く達成される」「どんな事ながらも変化していくという弁証法的な過程」

◎ ソ連の「経済学教科書」に対する批判

「資本主義が労働者階級の生活水準を攻撃（下げようと）する」という主張に対して、帝国主義段階では、「搾取によって得られたそのおこぼれの一部を労働者にも配分する」「したがって、帝国主義国の労働者階級は、もはや世界革命の前衛たり得ていない」現実を対置。それは〈労働貴族〉だけの実態ではない。

「武器競争は、労働者に対する搾取と独占資本の利益を増大させる」という平板な主張に対して、それは「失業を減らし、相対的な繁栄をもたらすだろう」と指摘。総じて、『経済学教科書』の記述は、プラグマティズムへ傾き、科学的な分析を放棄している点を批判した。

◎ チェ・ゲバラがキューバにいた6年間の現実

キューバは欧米諸国から借款を受けることができなかった。国際金融機関のローンも拒否された。貿易と援助は、発達した資本主義経済圏に比べるとはるかに弱小な経済力しか持たない諸国との間でなされていた。キューバ革命が成し遂げた経済的・社会福祉的な成果を、ソ連圏に包摂されたことでソ連からの援助に帰する意見も多いが、それは、キューバが自力で切り拓き達成してきた事実を蔑ろにするものである。

◎ チェ・ゲバラの遺産

立川シビル市民講座《チェ・ゲバラを読む》 2009/11～2010/1(全6回) 太田昌国

- ①「旅するゲバラ」 2009/11/14 (土)
- ②「1960年代の只中のゲバラ」 2009/11/28 (土)
- ③「浮上する民族・植民地問題とゲバラ」 2009/12/12 (土)
- ④「映像の中のゲバラ」 2009/12/26 (土)
- ⑤「ゲバラ・革命の経済学」 2010/01/09 (土)
- ◎⑥「未来からの目でゲバラを捉え返す」 2010/01/23 (土)

最終回に考えること

チェ・ゲバラの思想と行動が孕んでいる意味と「限界」。死後 40 数年を経て、いまラテンアメリカ地域に起きている現実の動きとの対比で。

「未来からの目で」——1950 年代後半、スターリニズム批判を先駆的行った埴谷雄高が依拠した立場。太田のことばで言い換えれば、現実があまりに貧しいとき、それを批判的に分析するにしても、それに拘泥するだけでは突破できない領域があるときの、ひとつの立場——現実の拘束性と想像力の飛翔

残された諸問題

1) 権力の問題

国家権力を旧体制から奪取することで革命を企図した 20 世紀型社会革命

■新たな、もうひとつの権力構造を生み出す——そのことを予知し、批判する運動は、マルクス主義と並行して、あった■アナキズムの可能性・未来性？

「反権力」から「非権力」あるいは「無権力」の領域へ——その水脈を探ることの重要性

2) 武力と戦争

解放闘争・革命戦争・ゲリラ戦争／解放軍・革命軍・人民軍

■帝国主義による圧倒的な支配・それに従属した腐敗せる国内体制——民主主義が存在しない、合法的な活動の可能性も奪われている条件下で「必然的に」生まれたたたかい方のゆくえ

3) 民族間の諸関係

1492 年コロンブス大航海によって世界規模でつくりだされた民族間の交差

■植民地支配によってつくりだされた民族間・国家間の支配と被支配関係。それが人間の諸関係に落とす影

4) 民主主義と自由

20 世紀型社会革命は、なぜ、例外なく、この問題で躓いたのか？——「敵」に包囲されている、という論理——多様性を認めず、すべてを一元化する論理に直結

☛ 肅清・ラーゲリ・収容所列島

5) フェミニズム

男性原理に拠って支配されてきた人類史の転倒

☛ 権力志向・他者支配・水平的関係ではなく垂直的關係を好む・戦争——などを支える論理を、何によって覆すか☛ 女性原理

ラテンアメリカの現在

社会主義国家権力・前衛党への不信の時代

それは、前衛党や強大な労働運動に依存することのない、自立的な民衆運動の時代

多様な課題に取り組む、脱中心的な（＝ひとつの権力下に身も心も預けてしまうことのない＝集中しない）発想に根ざした運動の展開

1980年代後半以降——民主化の過程で軍事政権体制が崩壊したあとで、上に見たような民衆運動が、新自由主義経済秩序とたたかいながら、ラテンアメリカ各国でいっせいに登場した

時代的には遡る例もあるが、典型的ないくつかを挙げると

1) 「未来からの目」は、文学・芸術の分野でこそ生まれる☛ 「多様性」が保証されない限り、あり得ない表現領域

1960年代以降の、ラテンアメリカ文学の活況

ボリビア映画集団・ウカマウ（ホルヘ・サンヒネス監督）の試行錯誤

2) 権力を求めず、「前衛」を僭称せず、戦争廃絶を展望する武装運動

1994年、サパティスタ民族解放軍の登場が意味するもの。

☛ ソ連崩壊（1991年）・コロンブス五百年（1992年）という時代背景の中で

☛ 「武装していること」の特権性を自覚、解放軍とはいえ上意下達でしかあり得ない軍隊秩序の非民主主義性

3) 国家間関係の水平性・平等性・相互扶助性・協働の模索☛ 「G8」的な秩序の崩壊を暗示☛ 「G192」へ

A L B A（米州ポリーバル主義同盟）

貿易決済のための共通通貨「スクレ」の発行・南の銀行創設

共通の報道発信のための Telesur の創設

4) フェミニズムの台頭

社会的に行き渡っているマチスモ（「男らしさ」なるものを誇示する傾向）、暴力による支配を前提とした軍事政権（たくさんの男たちが殺されて、女が否応なく復権運動の前面に立った例も）、男性優位の解放運動——それらが形づくってきた既成秩序に抗して

5) 上の2) と関連するが、先住民族出身の大統領の誕生☛ ボリビア、エボ・モラレス

政權が意味すること